

平成28年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 清水 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

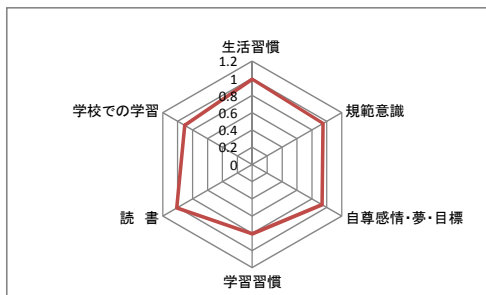
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.4	70	5.6	56	12.1	76	5.8	45
全国	10.9	73	5.8	58	12.4	78	6.1	47

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	基本的な学習の定着のために、まずは、繰り返しの漢字の練習、読書、辞書をひく等の基本的な学習を繰り返す必要がある。また、ローマ字の読み書きも、当該学年だけでなく、パソコンでのローマ字入力等で、慣れ親しませる必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	目的に応じて書く事柄を整理する問題や、図と表を関係づけて読む問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	表現の仕方をよりよくするための工夫を問う問題は正答率が低かった。ローマ字の読み書きの問題は、正答率が低く、無回答率も高かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	目的や意図に応じて、複数の本や文章などを選んで読んだり、資料を基に自分の考えを書く力に課題がある。長文に慣れ、どこが尋ねられていることか、必要なことは、何かを判断する力が必要である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	目的に応じて質問したいことを整理したり、質問の意図を捉える問題は全国平均正答率より高かった。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて、グラフをや表を基に、自分の考えを書く問題は、正答率が全国平均を上回ったものもあるが、無回答率は、全国平均の倍近くある。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	基本的な計算力については、取組の成果がでてきているようであるが、除数が少数のわり算や分数の計算は繰り返し練習し、定着を図る必要がある。単位量あたりの大きさは、関連する単元でしっかり押さえ習熟を図る必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	除法の計算の確かめや繰り下がりのある減法など、基本的な計算の問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	小数点の位置に留意する必要がある加減法や、単位量あたりの大きさを求める問題で、正答率が低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	問題の意味を考え、求める解のために、ほかの必要な情報を判断し特定することに課題がある。資料の読み取りや、資料から問題を解決するために必要なことを判断する力が必要である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	示された条件から同じきまりが成り立つかを調べる問題では、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	式の意味や数値の意味を記述する問題で、正答率が低かった。無回答の割合も多かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・読書に親しんでいる児童の割合は全国平均よりもやや多い。これまで読書活動に取り組んできた成果のひとつではないかと考える。 ・学習習慣としては、宿題はするが自分で計画を立てて勉強をしている児童の割合が全国平均よりもかなり低い。学習規律の徹底や家庭学習の取り組みせ方について、職員の共通理解と学年に応じた系統的な取り組みの実施が必要である。 ・学校での学習で、課題に進んで取り組むことや、話し合い活動を行って自分の考えを深めたり広めたりしている割合は全国平均よりも10ポイント以上低かった。興味関心の持たせ方の工夫や、学習形態の工夫などの授業改善が必要である。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<p>◎学力向上のための特設時間の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火曜日と木曜日の朝の活動を「学力チャレンジタイム」とし、特に木曜日は学力アップのための「ぐんぐんタイム」と銘打ち全校一斉に算数の基礎練習問題に取り組む。学習したものは、各自のファイルに記録させ、伸びを実感させる。 <p>◎子どもの理解を深めるための授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の進め方や話し合いの仕方など「学び方」の指導を継続的に行うとともに、書画カメラや電子黒板等のデジタル機器およびデジタル教科書等を活用することで、学習中に子どもたちの視線や意識を集中させたり、学習内容の理解のしやすさにつなげたりする。 <p>◎「書く」ことを習慣化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の中で、自己の考えを決められた時間にまとめられるように書く習慣をつける。 ・学習の最後を「振り返りタイム」として、振り返りを書くようにする。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>◎家庭学習のスタンダード化(時間・学年別・教科別内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習時間のめやすを(学年×10分)程度とする。 ・校内で作成した「家庭学習の手引き」について通信や懇談会等で知らせる。 ・懇談会やPTA理事会などの機会に「家庭学習チャレンジハンドブック」を活用し、家庭学習の意義や取り組み方などについて伝える。 <p>◎全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童質問紙の内容で重点的に取り組むものを抜粋して、全児童にアンケートを実施することで、課題を明確にし、職員の共通理解のもとで課題解決に取り組む。 ・学校だよりや学校HP、家庭教育学級等で結果と取組を説明し、家庭と連携し協力体制を整える。
